

左京二条二坊十五坪の調査

—第601次

1 はじめに

本調査は住宅建設にともない事業地内における遺構のあり方をあきらかにすることを目的として実施した。

既往の調査　調査地は平城京左京二条二坊十五坪の南半中央にあたる（図265）。十五坪中央～北半でおこなった過去の調査では、古代・中世の遺構を重複して検出している（第501次調査『紀要2013』、第514次調査『紀要2014』）。特に、第514次調査F区ではSK10388から三彩瓦が多量に出土し、周辺において三彩瓦を葺いた建物が存在した可能性が指摘されている¹⁾。

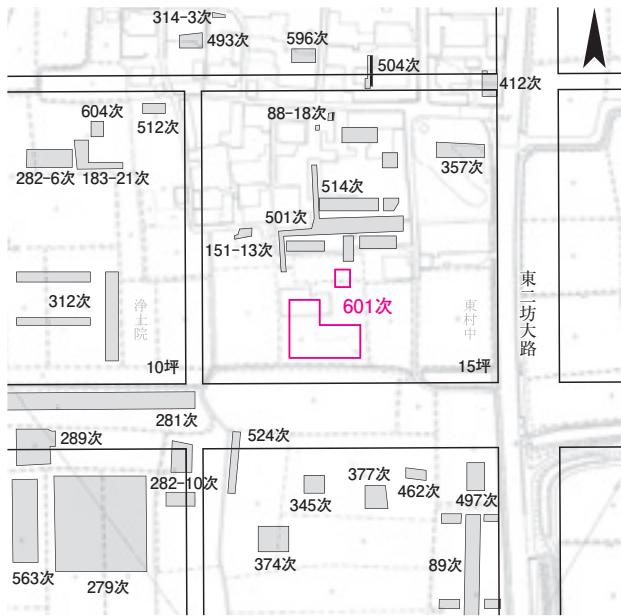
調査区・調査の経過　調査区は当初、東西28m、南北13mの西寄りに東西12m、南北4mが北に張り出す412m²分を設定し、2018年7月5日に調査を開始した。遺構検出は7月31日に終了したが、奈良時代の遺構の存在が予想された調査区北西の様相を確認することと、第514次調査で検出した遺構との対応関係を確認することを目的として、調査区北西を72m²（東西12m、南北6m）拡張し、調査区北方にも別に42m²（東西6m、南北7m）の北調査区を設けて調査を進め、9月3日に埋め戻しを完了した。最終的な調査面積は計526m²である。

2 基本層序

地表から表土・造成土（0.4m）、旧耕作土・床土（0.4m）、遺物包含層（灰褐色粘質土、0.1~0.2m）が堆積し、調査区北部と北調査区では黄灰色粘土、南部では青灰色シルトの地山に達する。調査区西北部では、床土下面に礫が多く混じる層があり（0.1~0.2m）、その下位に炭混橙褐色砂質土による奈良時代の整地土が遺存する（約0.1m）。また調査区東部と北調査区では遺物包含層下位に炭混褐灰色土や黄灰色砂質土による奈良時代の整地土が遺存する（約0.1m）。遺構検出は奈良時代の整地土および地山上面でおこなった。遺構面の標高は60.6~60.8mである。

3 検出遺構

奈良時代の掘立柱建物、土坑、溝、井戸と中・近世の濠状遺構、土坑を検出した（図266・267）。



奈良時代の遺構

後述する中世の濠状遺構SD11270により、大半が削平されていたが、調査区西部と調査区東部において奈良時代の遺構を検出した。これらは調査区西北部における整地土との層位的関係と遺構の重複関係をもとに、Ⅰ期からⅢ期の3時期に大きく分けることができる。

I 期

SD11231　調査区南部で検出した東西溝。SD11270に大きく削平されるが、調査区東部では奈良時代の整地土とみられる炭混褐灰色土の下で検出した。幅0.4~1m、深さ0.1~0.4m、埋土は暗灰色粘質土である。

SK11240　調査区西部で検出した大型の土坑（図268）。東西5m以上、南北約7m、南端は幅約1.6mの東西方向の溝状を呈して調査区外西方へ続く。深さ0.1~0.2mで東部では深さ約0.1mの不整楕円形に窪む。また土坑北端部ではSD11241が接続する。中世のSD11270、SD11271、SK11272、SK11273により削平を受けているが、SD11270と重複しない土坑西部では明橙色砂質土で整地されていることを確認した。

埋土は炭混じりの褐色砂質土（炭層）で、上位に粉状の炭が多く、下位に塊状の炭片と木片が多い傾向が見られたが、土坑内全てが同様の堆積状況を示すものではない。埋土からは奈良時代前半の土器とともに炭・鑄造関係遺物・瓦などが多量に出土し、何らかの造営工事に関連する一括廃棄土坑と考えられる。

なお、SK11240の掘り下げにあたっては、土坑上面に堆積するSD11270に由来するとみられる中世の遺物を含

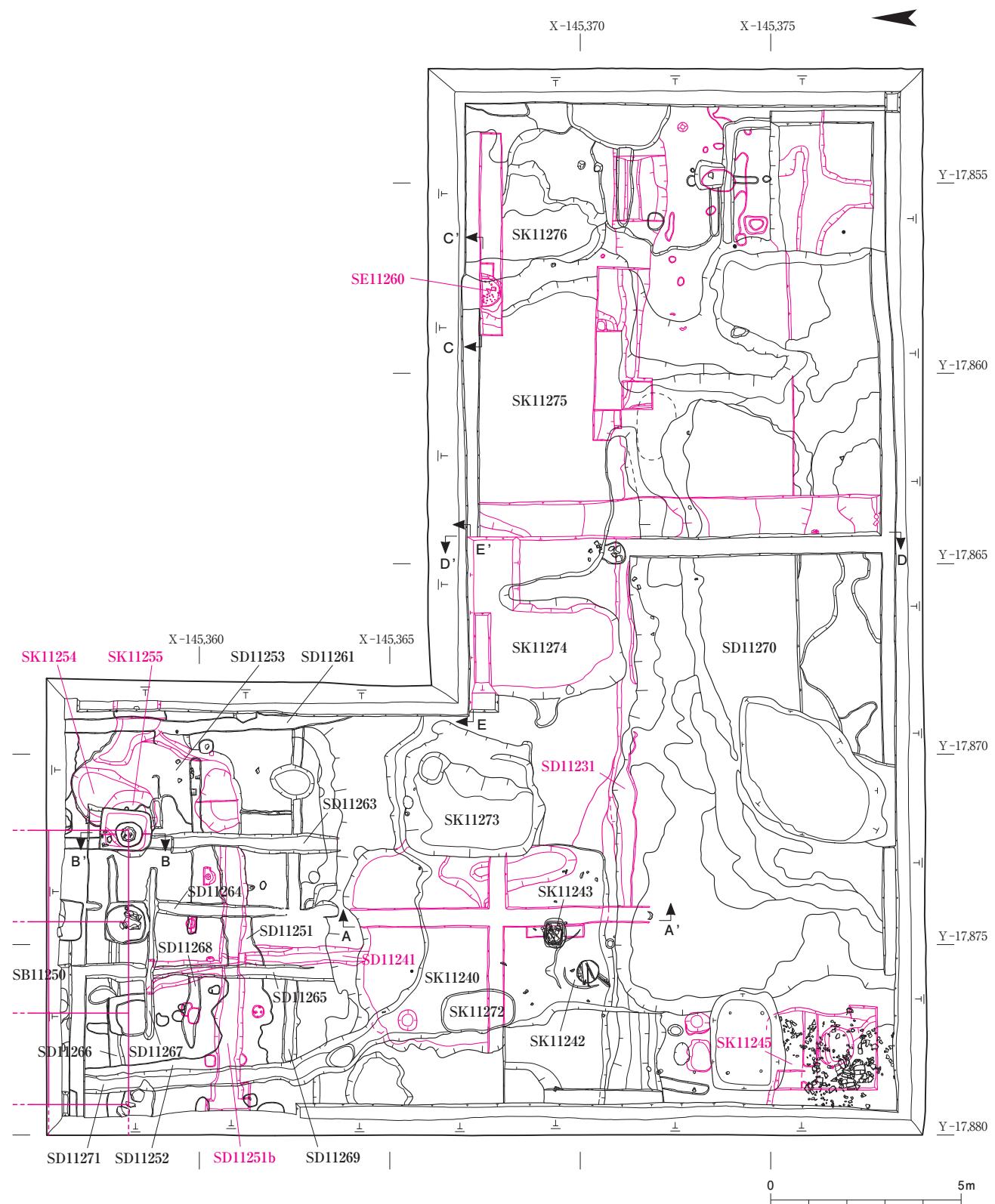


図266 第601次調査遺構図 1:150

む灰褐色粘質土を除去し、土坑本体の埋土（炭層）を上下2層に分けて掘り下げる（図269）。

II 期

SD11251・11252・11253 調査区西北部で検出した溝。

SD11241を埋め、整地した後に掘り込む。調査区北方から続く南北溝SD11252が東西溝SD11251に接続し、さらに東部では緩やかに調査区外東方に延びるSD11253に接続する。幅0.7～1.3m、深さ約0.2mで埋土に炭を含む。



図267 第601次調査区遺構検出状況（拡張前 南西から）



図268 SK11240 検出状況（東から）

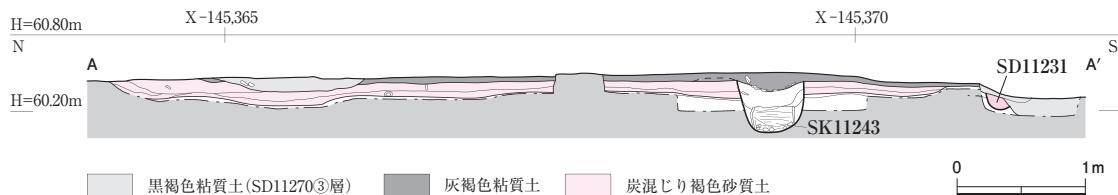


図269 SK11240南北土層図 1:60

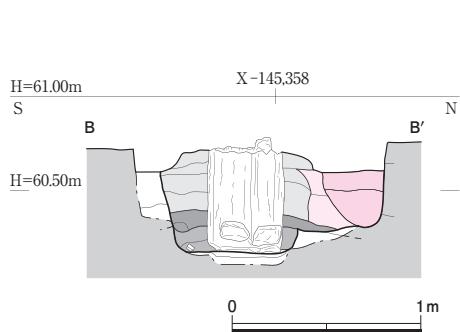


図270 SB11250東南隅柱穴土層図 1:40

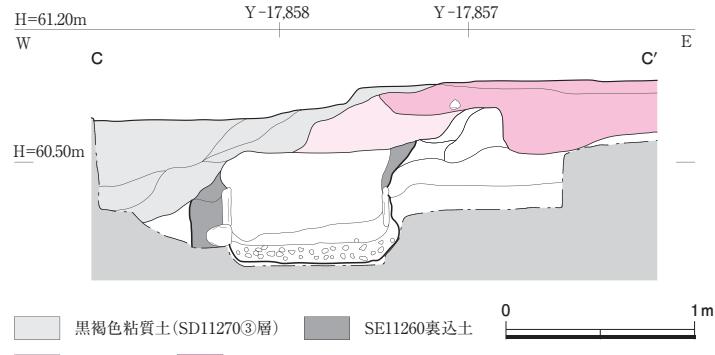


図271 SE11260土層図 1:40

SD11253の北方では溝底面でSK11254・11255を検出した。またSD11251底面で東西溝SD11251bを検出した。調査区外西方に続く。当初SD11251b、SD11253と続いていた溝をSD11252へと付け替えたとみられる。

III 期

SD11261～11269 調査区西北部で検出した東西方向5条、南北方向4条の小溝群。いずれも幅0.2～0.3m、深さ約0.2m。交差する溝同士の前後関係の確認が難しく、同時に埋没した可能性も考えられる。SD11263はSB11250の柱穴掘方と重複し、SB11250より古い。またSD11268からは緑釉が付着したトチンが出土した。

SB11250 調査区西北部で検出した掘立柱建物。東西3間、南北1間分を検出し、総柱建物となる可能性が高

い。柱間は約2.1～2.4m。東南隅の柱穴では八角形に面取りされた柱根が遺存していた（図270）。一辺約1.2m、深さ約0.5mの掘方を掘削した後、掘方南寄りに柱を据え、暗灰色系の粘土を柱周囲に巻き、掘方全体を黄褐色系の粘質土で埋めている。掘方から奈良時代末頃の土器が出土した。その他の柱穴では柱が抜き取られており、抜き取り穴から部材とみられる凝灰岩や安山岩が出土した。東から2基目の柱穴では礎盤が据えられていた。

時期不明の遺構

中世以前に属する遺構だが、上記のⅠ期～Ⅲ期への位置づけが難しい遺構について記す。

SK11245 調査区西南部で検出した。東西4m以上、南北4m以上、深さ約0.2mの土坑で調査区外西方・南

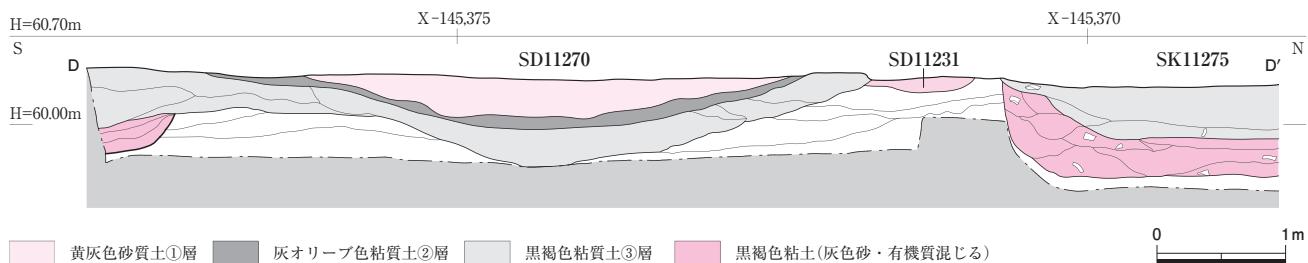


図272 調査区南部南北断割土層図 1:60

方へ続く。埋土は暗灰色粘質土で、最上面から軒丸瓦・軒平瓦を含む多くの瓦と土器が炭とともに出土した。

SK11242・11243 SK11240南部において、円形の曲物(SK11242)と隅丸方形の側板(SK11243)を据え付けた遺構を検出した。いずれもSK11240埋め立て後の遺構である。SK11242は径約0.6mで、底板の一部と高さ約0.1mの側板が遺存する。底板はSK11240底面より下位の褐灰色砂層に据えられている。SK11243は南北約0.3m、東西約0.5mで高さ約0.1mが遺存する。SK11240の炭層埋土上面から掘り込まれており(図269)、側板を覆う黒色粘質土上面から奈良時代末～平安時代初頭に属する土器が出土した。

SE11260 調査区東部で検出した井戸。径約1.1mの掘方に径約0.8mの円形の曲物を井戸枠として据える。SK11276とSD11270により壊されている。曲物の据え付けにあたり、15cm大の石を据えて高さを調整している。井戸底に5cm大の礫を敷き詰めている。枠内の埋土は暗灰色砂が混じる黄灰色粘質土で、上層に灰色砂質土が堆積する(図271)。埋土中から三彩軒瓦と奈良時代末～平安時代初頭に属する土器が出土した。

中世の遺構

SD11270 調査区南部で検出した濠状遺構。北東方向から南西方向への流れを本流とし、周辺は浅い湿地状を呈していたものと考えられる。調査区西北部ではSD11271が接続する。北調査区のSD11280も一連の可能性が高い。調査の制約上、調査区南部では本流部分に対して南北方向の断割調査に留めた。これによるとSD11270は大きく3段階の変遷が確認できる(図272)。1段階(③層)は底面にSK11272・11273・11274・11275の複数の土坑が掘り込まれており、これらの土坑間では堤状・岬状の部分を残す。埋土は下層に灰色砂・有機質の混じる黒褐色粘土が堆積し、黒褐色粘質土で埋まる。また、SK11275の南辺は水口があり、貝殻などの動物遺体が集積していた。2段階(②層)は灰オリーブ色粘質土で、1段階のSD11270の埋め立て土にあたる。3段階

(①層)は幅約3.8m、深さ約0.3mの深い溝となる。埋土は黄灰色砂質土である。1段階の埋土からは14～15世纪代の土師器皿・羽釜や木製遺物が出土し、3段階の埋土からは近世陶器が出土した。

SD11271 調査区西北部から南流し、SD11270に接続する。幅0.4～0.7m、深さ約0.2m。埋土は黒褐色粘質土である。

SK11272 調査区西部、SD11270の底面で検出した。SK11240と重複し、これより新しい。東西0.9～1m、南北約2mの長楕円形を呈し、深さは0.3m。埋土は黒褐色粘土である。

SK11273 調査区西部、SD11270の底面で検出した。SK11240と重複し、これより新しい。東西2～3m、南北約3.7mで深さ約0.6m。埋土は上層が黒褐色粘土で下層が灰色砂の混じる黒褐色粘土である。「法花寺」などと墨書した板状木製品(図276)が出土した。

SK11274・SK11275 調査区中央、SD11270の底面で検出した連結する2基の土坑。調査区外北方へ続く。SK11274は東西幅約2.5m、SK11275は東西幅約7.5mで、両者の間には上端東西約0.6m、南北約3mの岬状の高まりが存在する。深さはともに約0.8m。土坑の南壁寄りには炭が多く、多数の瓦が出土した。両土坑の堆積状況については後述する。

北調査区の遺構

調査区北方の北調査区では奈良時代の柱穴、溝、土坑と中・近世の溝、土坑を検出した(図273)。

SD11283 北調査区東部で検出した南北溝。西肩のみを検出し、東肩は調査区外東方と考えられる。幅1.1m以上、深さ約0.2m。埋土は黒色粘質土・黒褐色砂質土である。調査区南寄りで岬状の高まりが残り、土坑が連結し溝状を呈していた可能性も考えられる。位置と標高からみて第514次調査F区で検出したSK10388に対応すると考えられる。

SK11282 北調査区西部で検出した土坑。東肩は後述のSK11281に壊されており、西肩は調査区外西方に続く。

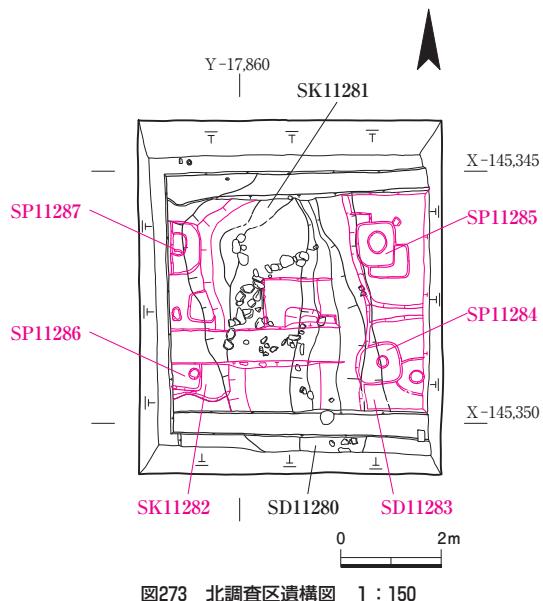


図273 北調査区遺構図 1:150

南北約3.8m。埋土は炭を多く含む黄灰褐色砂質土である。奈良時代に属する土器が出土した。

SP11284～11287 北調査区で検出した柱穴群。いずれも一辺0.8～1mで方形を呈する。SP11284・11285はSD11283より新しく、重複関係から2時期ある。また、黄灰色砂質土による奈良時代整地土に覆われている。SP11286・11287は土坑SK11282の底面で検出した。SP11284～11287は柱筋が揃うが中央をSK11281に壊されており、建物を構成するか否かは不明である。SP11284・11285は第501次調査区から続くSA10392または第514次調査区のSB10389に続く可能性がある。

SD11280 北調査区中央で検出した南北溝。幅0.9～1.3m、深さ約0.3m。埋土は底面に褐灰色砂質土が堆積し、黒褐色粘質土で埋める。14～15世紀の土器が出土した。南方でSD11270に接続すると考えられる。

SK11281 北調査区中央で検出した土坑。SD11280に東肩を壊されている。東西約3m、南北約5mの長楕円形を呈する。深さ約0.3m。下層に黒褐色砂質土が堆積し、暗灰黄色砂質土で埋める。この埋め立て土上面で、弧状に並ぶ人頭大の石と杭止めされた板材を検出した。

(小田裕樹)

4 出土遺物

木製品（漆製品含む） 木製品はSD11270、SK11240、SK11273など複数の遺構や遺物包含層から出土した。

SD11270からは、下駄2点、曲物（側板・底板）、漆器椀2点、桶底板1点、加工棒、用途不明の部材片などが出土した（図274）。いずれも中世以降の遺物と考えられる。下駄は連歯下駄と差歛下駄のそれぞれ1点ずつで、後者は平面が隅丸方形形状を呈し、前壺が中央に配置されるものである。曲物は2点とも漆塗がみられる。側板は樺皮で綴じられたもので黒漆塗りの痕跡が確認できる。口径（外径）約15cm、器高6cm以上。同遺構で出土した別個体の底板にも黒漆塗のものがある。漆器椀には全形のわかる資料がある。高台がつき、口縁部まで緩やかに立ち上がるもので、復元口径15cm以上、器高8.5cm以上。内面赤塗り、外面黒漆塗りで、外面中央に花弁文が描かれる。SK11240からは、加工棒のほか、漆漉し布片が複数出土した。

このほか注目される遺物としてSK11273から出土した板状品がある（図276）。表面に2行分の墨書が認められる。「常住」は常住物の略で、寺院に常時備えつけられている共有物の意。中央と右下に、それぞれ対になる紐穴が確認できる。容器の蓋板、または折敷の底板であろう。また表面に刃物傷が多く残っており、まな板に転用された可能性がある。柾目。同遺構から同形の板状品がもう1点出土している。（芝康次郎・浦 蓉子・山本祥隆）

金属製品 鉄角釘と銅釘、銅製キセル吸口が出土した。銅釘は頭部が不整円形で径0.4cm、長さ3.7cm。SK11240出土。このほかはすべて遺物包含層からの出土である。

冶金関連遺物 鉄、銅、ガラス生産に関連する遺物が含まれる。これらの大部分はSK11240から出土したが、SD11270や奈良時代整地土、遺物包含層からも出土している。内訳は、鞴羽口片、坩堝片、鉄滓片、銅滓、ガラス小玉鋳型等で、鞴羽口片がもっとも多い（図275）。鞴羽口はすべて直線羽口で、口径が5～6cmと7～8cmの2種がある。坩堝は、破片資料が多い。内面に銅の溶融物が付着したものがある。鉄滓は最大3cm程度で量的に少ない。銅滓も2cm程度のものが多い。ガラス小玉鋳型（図277）は土師質の粘土板で、表面に直径3mm程度の小孔を穿つ。鋳型の右側と下部は欠失しており、小孔は現状25個残る。小孔の底面にはガラス小玉の紐通し孔用の芯を立てる径1mmの微小孔がみられる。

石製品・玉製品 石製品には、砥石、滑石製石鍋片がある。砥石は14点出土した。片麻岩製が2点あるほかは



図274 SD11270出土木製品



図275 SK11240出土冶金関連遺物

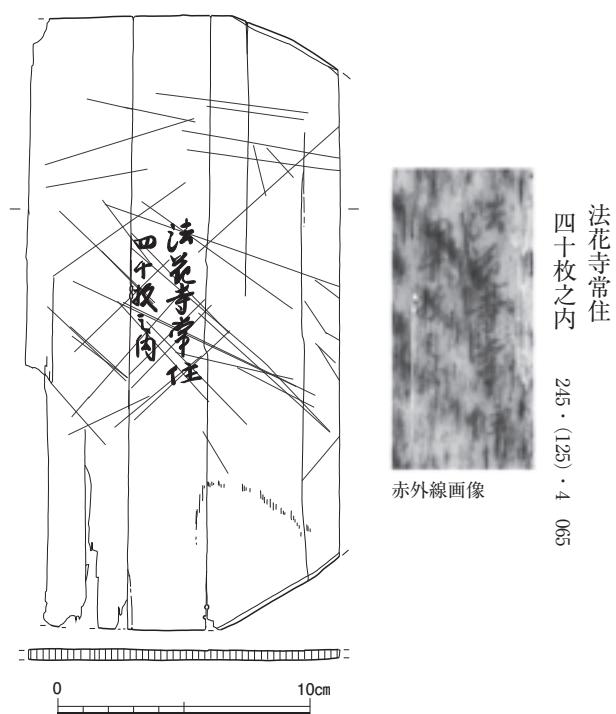


図276 SK11273出土板状木製品 1 : 3

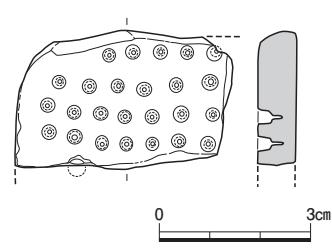


図277 SK11240出土ガラス小玉鋳型 2 : 3

すべて泥岩製である。5点がSD11270、3点がSK11240出土。石鍋片は3点出土し、うち2点は口縁外部に鍔が周る鍔付石鍋である。外面の黒色化が著しい。2点はSD11270、1点は遺物包含層出土。玉製品には滑石製白玉1点がある。径0.5cm、厚さ0.3cm。SK11240出土。

(芝康次郎)

瓦磚類 本調査区で出土した瓦磚類は表40に示した。

図278-1・2は五重弧文である。この2点は文様が異なり挽型は2種類ある。いずれも貼り付けの段顎で頸の長さは8cmほどある。7世紀後半の瓦であろう。奈良時代の軒瓦で出土数が最も多いのは6285A-6667Aである。3の6285Aは外区外縁の頂部を削って幅1.2cmほどの平坦面を作る。4の6667Aはすべて段顎で範傷は見当たらぬが、瓦当面に繩タタキがあるものとないものがある。この組み合わせは皇后宮所用であろう。この組み合わせはSK11240から出土している。このほか、法華寺に関連するところでは宮寺所用とされる6282B-6721C(5・6)、法華寺金堂所用の6138B-6714A(9)、阿弥陀浄土院所用の6138F-6767B(7・8)が成立するが数は少ない。

施釉瓦は計29点出土した。内訳は軒平瓦6667D1点、型式不明軒平瓦が5点、丸瓦9点、平瓦12点、熨斗瓦2点である。釉色は残存状況により単色しか観察できない資料もあるが、おそらくすべて三彩であろう(巻頭図版8)。これまで同坪では三彩瓦が多く出土しており、今回の三彩瓦の胎土や三彩の文様構成(斑文1)は同坪の既出品と一致し、瓦の年代はII-2期~III-2期である²⁾。

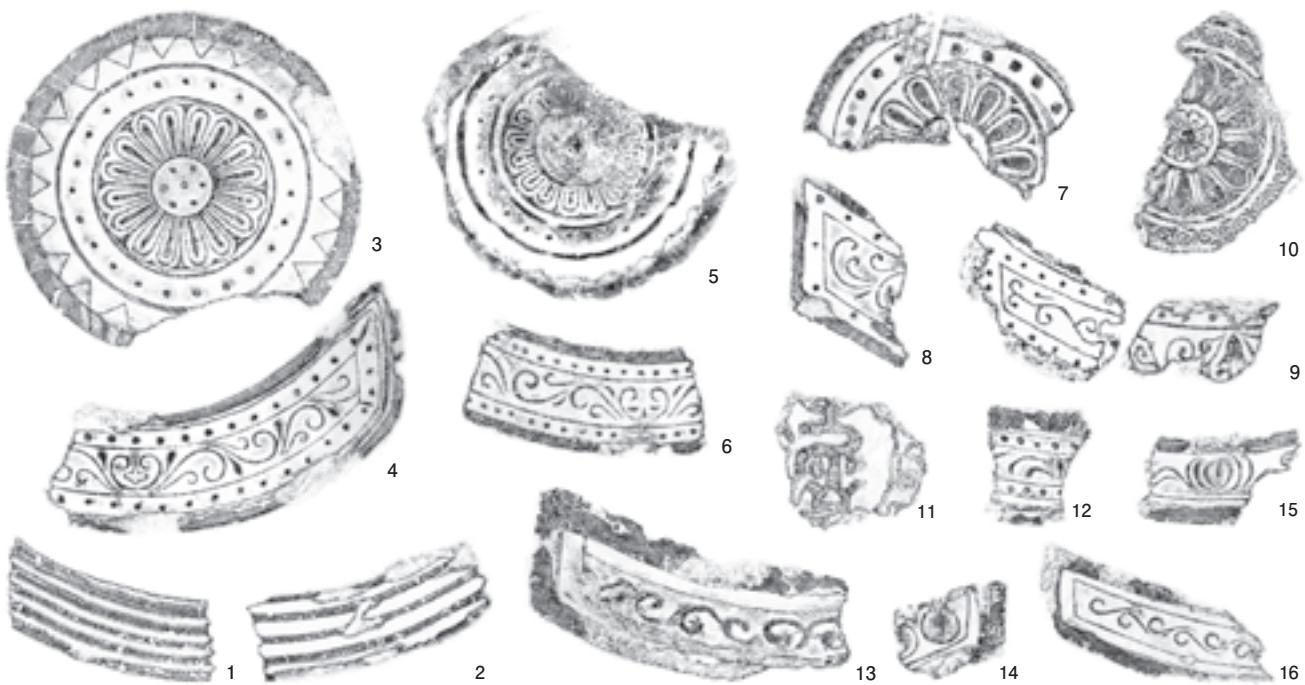


図278 第601次調査出土土器 1:4

表40 第601次調査出土瓦類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類		点数
6132	A	1	6641	F	1	丸瓦 (奈良・三彩)	3	
6135	A	1	6663	A	1	(奈良・緑釉)	2	
6138	B	2		Cb	2	(奈良・施釉)	3	
	F	2		C	3	(ヘラ書)	3	
6225	A	2		E	2	丸瓦? (奈良・施釉)	1	
	C	1		?	2	平瓦 (奈良・三彩)	2	
6275	Ab	1	6664	C	3	(奈良・緑釉)	4	
6279	A	1		?	1	(施釉)	5	
6281	Bb	1	6667	A	13	(刻印)	1	
6282	Ba	1	(三彩)	D	1	(ヘラ書)	1	
	Ca	1	6671	A	1	平瓦? (奈良・施釉)	1	
	E	1	6675	A	1	面戸瓦	14	
	?	1	6681	B	1	熨斗瓦	4	
6284	A	3	6685	B	1	(奈良・三彩)	1	
	C	1	6714	A	4	(奈良・緑釉)	1	
	?	2	6721	C	2	切熨斗瓦	5	
6285	A	9		Fa	1	割熨斗瓦	4	
	?	2		Ga	1	雁振?	1	
6291	A	1	6767	B	1	鬼瓦 (中世)	1	
6301	A	1	6801	A	1	鷺尾	1	
	B	3	重弧文		7	磚	11	
6304	N	1	五重弧文		4	凝灰岩	2	
6308(刻印)	B	1	東大寺510A		1	用途不明道具瓦	9	
6311	B	1	古代		3	用途不明道具瓦?	2	
	F	1	鎌倉		10			
6313	C	1	(巴文)		1			
	?	1	(連珠文)		1			
6314	A	1	室町		1			
6316	B	1	中世		1			
6320	A	1	(蓮華唐草文)		1			
巴(鎌倉)		1	型式不明(奈良)		8			
(中世)	3		(三彩)		2			
薬096(「法」銘)	2		(緑釉)		1			
古代	1		(施釉)		2			
平安(不退寺式)	1	時代不明			3			
中世		2						
近世		1						
型式不明(奈良)		23						
時代不明		8						
軒丸瓦計		89	軒平瓦計		89	その他計		82
丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ				
重量	503.622kg	1196.63kg	28.896kg	31.31kg	0.09kg			
点数	4010	12194	42	6	2			

鳴尾は腹部と鰐部・胴部の接合部分が残存する。ただし、側面には段や縦帯の表現は見られない。腹部、鰐部・胴部とともに厚さは3.5cm前後ある。古代の鳴尾は法華寺およびその周辺では初出である。

10は不退寺式の軒丸瓦で法華寺、海龍王寺からも出土している³⁾。組み合う軒平瓦は出土していない。平安時代前期である。11は「法」字銘軒丸瓦で薬師寺96型式と同範。同文の瓦は法華寺、海龍王寺でも出土している。鎌倉時代か。13は薬師寺321型式に近いが異範である。計6点出土した。同文の軒平瓦は法華寺、海龍王寺、秋篠寺から出土している。12は興福寺食堂100型式のいずれか、14は東大寺510Aと同範であろう。以上は鎌倉時代の瓦である。15は蓮華唐草文、16は中心文不明の唐草文で、いずれも室町時代である。

本調査区から出土した軒瓦をみると、左京二条二坊十五坪は法華寺旧境内にあたるが、法華寺以前の不比等邸、皇后宮、宮寺の瓦、特殊な三彩瓦が出土している。また、中世以降の瓦も一定量出土しており、同坪の変遷を推測するうえで重要なてがかりとなろう。(今井晃樹)

土器・土製品 調査区全体から整理用コンテナ99箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代と中世の土器を主体としており、一部古墳時代や近世の土器を含む。現在も整理作業中であり、主なものを報告する。

まず図279に特徴的な土器・土製品を図示した。1は緑釉が付着したトチン。三方の支脚を上下に組み合わせる形態で、栗栖野13号窯や吉志部瓦窯に類例がある。色調は淡褐色を呈し、上面に緑釉が付着する。SD11268出

土。調査区からはこの一点のみの出土である。2は三彩小壺。復元口径10.2cm。外面に緑・褐・白の三種の釉を点描し口縁部内面には白色釉を施釉する。硬質の焼成である。3は板状土製品。両面に緑釉が付着する。施釉製品焼成の棚板の可能性がある。後述する箱形土製品I類の底部に厚みが似るもの、胎土に5mm前後の砂礫を多く含む点、二次被熱による明瞭な変色が見えない点が異なる。SD11270出土。4は三彩盤の底部か。両面に緑釉と白釉を施釉する。胎土は精良で灰白色を呈する。北調査区包含層出土。5は須恵器皿B。内面に同心円状の当て具痕が明瞭に残り、平滑であることから転用硯とみられる。SK11242出土。この他、調査区からは転用硯、漆付着土器、製塩土器、被熱土器などが多量に出土した。また墨書土器も40点ほど出土しており、「麻呂」「福」「南□」などの文字が認められる。

次に主な遺構出土土器を示す(図280)。1~7はSK11243出土。椀A、皿Aは外面にヘラケズリを施す奈良時代後半の特徴を示す。4は本来SK11240に帰属していたか。7は計量容器として使用される器種であるが墨書等はみられない。8~10はSE11260出土土師器。いずれも灯明皿として転用されている。奈良時代末~平安時代初頭に属する。11~26はSK11240炭層出土。11~17は土師器。13は内面全体に漆が付着する。18~26は須恵器。18は杯H。炭層上面からではあるが、かえりつきの杯蓋も出土している。21は内面、破面にベンガラが付着する。20・22・23は漆が付着しておりパレットおよび貯蔵容器として使用されたことがわかる。SK11240出土土器は二段放射暗文および一段放射暗文を施す土師器杯Aが存在する点から、奈良時代前半(平城宮土器I~III古段階)に属すると考えられる。これはSK11240埋没後のSK11243出土土器が奈良時代後半を示すこととも整合的である。

箱形土製品 SK11240を中心として、周辺のSD11270埋土や遺物包含層から多数出土した用途不明の土製品である(巻頭図版8・図281)。方形の箱形を呈し、口縁部外面を中心に強い二次被熱を受け、赤色~白色に変色する特徴がある。また、この箱形土製品と同様の調整・胎土および二次被熱による変色を特徴とするつまみを有する蓋があり、蓋と身のセットで使用されたものと考えられる。

蓋は98片、7個体以上出土し、完形近くまで接合でき

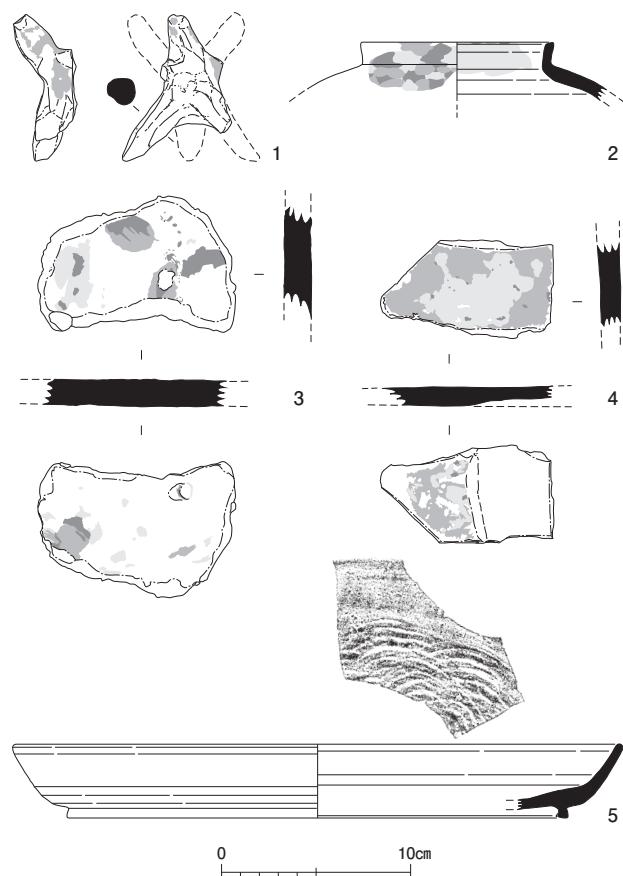


図279 第601次調査区出土土器・土製品 1:4

たものが4点ある(1~4)。1は長軸約32cm、短軸約26cm、厚さ約1.5cmで長方形を呈する。外面は指頭圧痕が明瞭で、中央に長方形のつまみを貼り付けて、一方に竹管状工具の刺突により顔面を表現する。内面は器面の剥落がみられるが、木目痕と横方向の直線的な圧痕が観察できる。口縁端部付近にも直線的な圧痕があり、これを境に端部が折り返されている。この端部付近は粘土紐の接合痕が明瞭である。全体に二次被熱を受けており、特に外面はひび割れが顕著で、赤色~白色に変色する。ただしススなどの付着はみられない。

以上の特徴は2~4も同様である。特に1・3・4はほぼ同じ大きさである。また2は一回り大きいが、内面の直線的な圧痕部分(長軸約30cm、短軸約24cm)で比較すると1・3・4と同じサイズである。これらの痕跡をふまえると蓋は、幅約6cm、厚さ5mm程の板を継ぎ合わせた「型板」のようなものを用いており、これに粘土を押し付けることにより成形したと想定する。

身は破片が多く、全形を復元し得るものは5のみと少

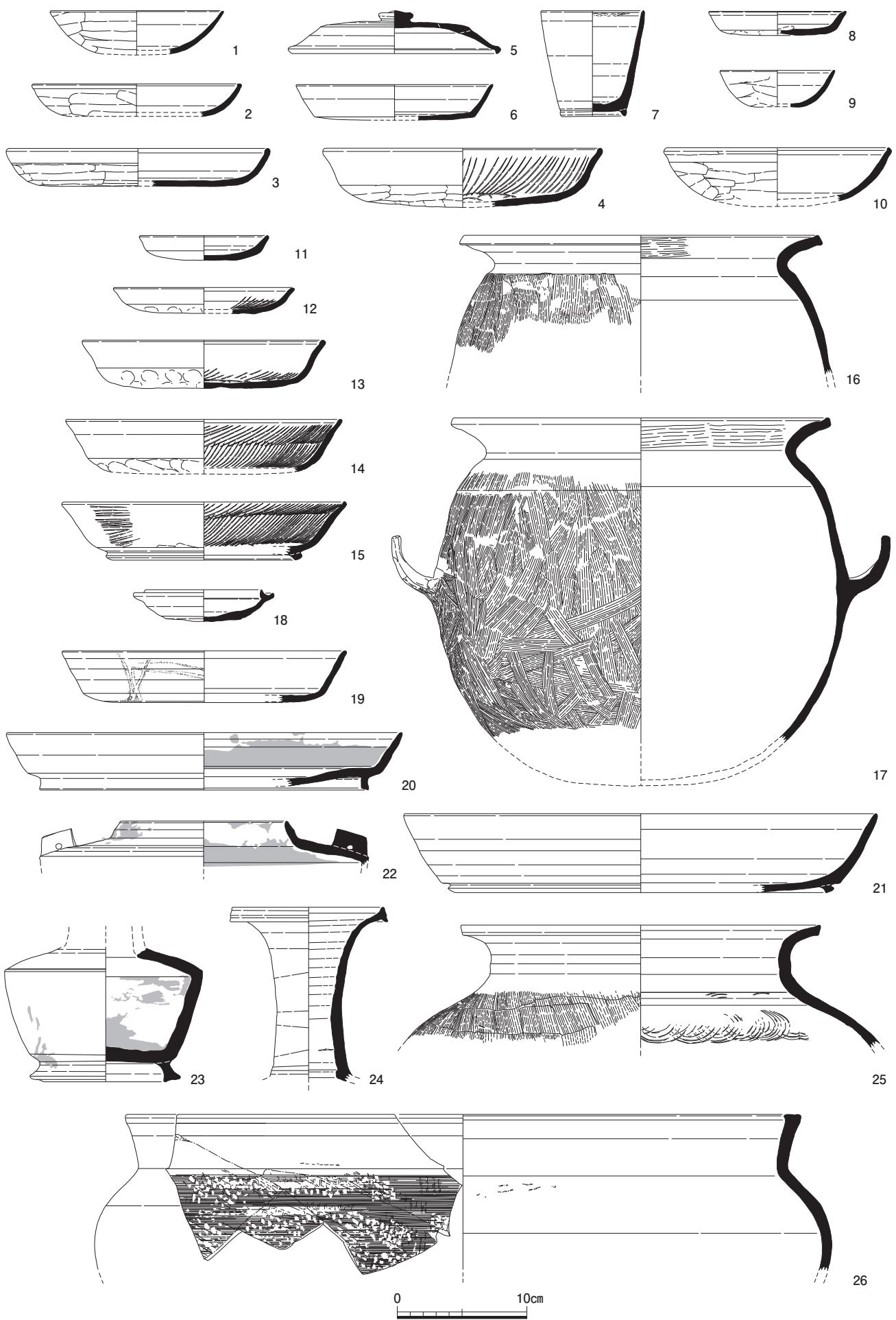


図280 第601次調査出土土器 1:4

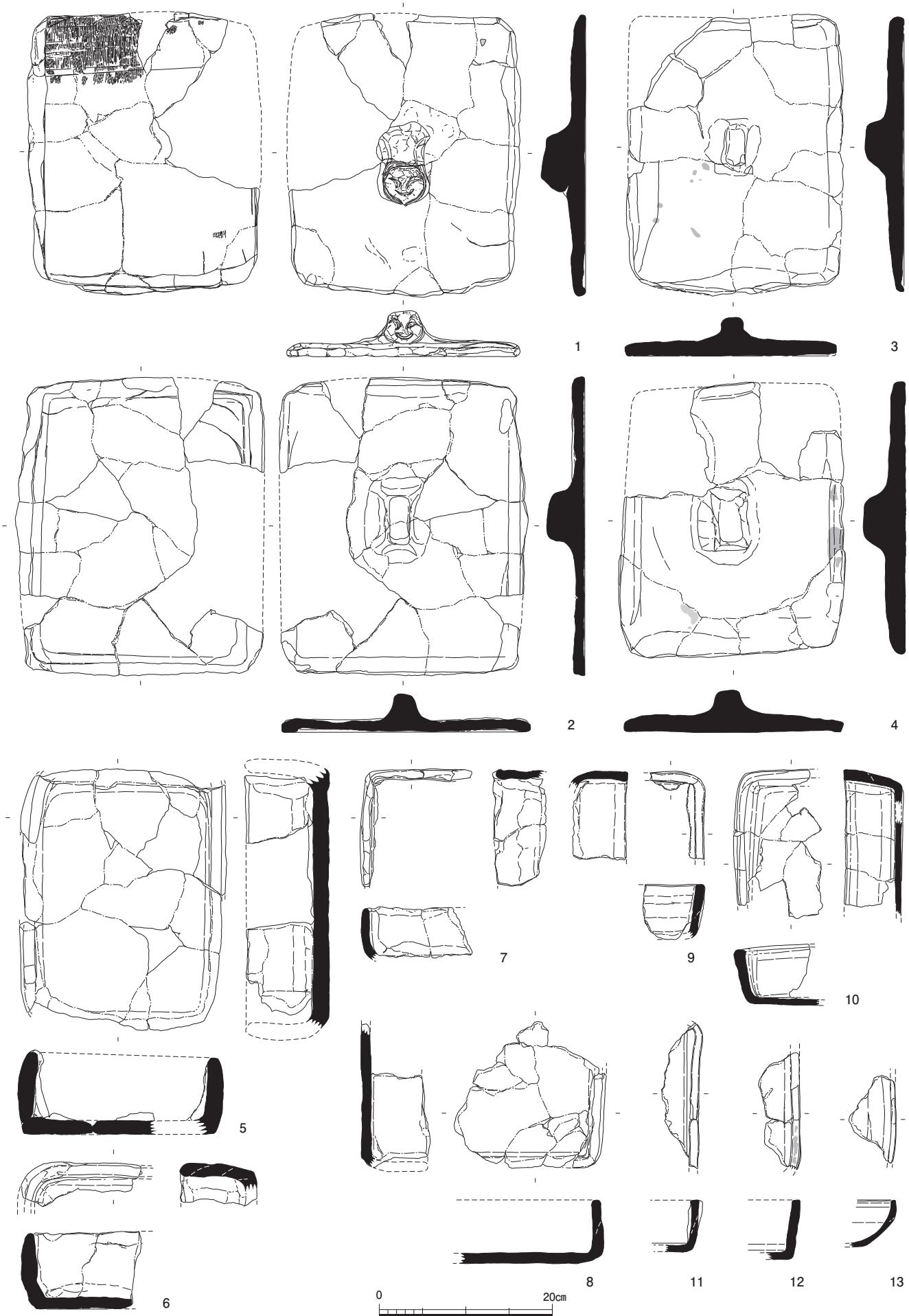


図281 平城第601次調査出土箱形土製品・蓋 1:6

ない。5は底部で長軸約30cm、短軸約23cmで長方形を呈し、厚さ約1.5cm、器高9.0~9.5cmである。口縁部がやや内湾気味に立ち上がり端部を丸くおさめる。短辺の口縁端部内々間距離は約20cmである。口縁部および底面の破面を観察すると、底部を板状に成形し、その上に口縁部となる粘土を積み、内側にも粘土を貼り付けている。身については以下のように分類する。

I 類 器壁が1.5cm前後と厚いもの（5・6）。胎土に3~5mm前後の砂礫を含む。内側の深さは6.7~7.2cm。

II 類 器壁が5mm~1cmと薄いもの。口縁部が直立し、底部と口縁部を比較すると口縁部の方が薄い傾向がある。胎土はI類に比して精良で、1~3mmの砂粒を含む。口縁部形状により、口縁端部上面に平坦面をもつもの（II A類、9~12）と口縁端部を丸くおさめるもの（II B類、7・8）に細分できる。内側の深さはII A類が4.7~5.4cmに対し、II B類が5.0~6.4cmとやや深い。

III 類 底部から口縁部が緩やかに立ち上がり、底部との境が明瞭でないもの（13）。隅角部が確認できず、箱形を呈するか否かを確定できないものの、二次被熱を受けており、胎土・調整がII類と共通する。

現時点での暫定値であるが、調査区から出土した箱形土製品は蓋も合わせて総破片数763片、約22.3kgある。各類型について口縁部残存破片数計測法および個体識別法で比較すると、II A類が95片、少なくとも12個体以上あり、I類（10片、3個体以上）、II B類（16片、4個体以上）、III類（25片、6個体以上）より多い。

この箱形土製品の諸特徴を整理する。①方形を呈する。②二次的な高熱を受け赤色・白色に変色している。口縁部外面では端部から1~3cmほどの幅が帶状に赤変し、隅部ではさらに下位まで変色する傾向がみられる。③身の口縁端部形態や器高には統一性がなく、器壁が厚いもの、薄いものがある。

また、④蓋と組み合わせて使用したと考えられる点と⑤規格性の存在も特徴である。蓋が型板を用いて製作されたとみられること、全形を復元しうる5が蓋と同様のサイズであることから、蓋と身はともに型板を用いて製作された可能性が考えられる。ただし、この規格性は身の口縁部形態や器高を規定するものではない。

蓋の存在からは箱形土製品の内容物に外部（上部）からの混入物を防ぐ意図が考えられる。ただし、蓋や身II

B類のように口縁部に凹凸が存在することからみて、密閉するまでの意図はなかったようである。また、蓋と身を比較すると、蓋は破片が大きく完形に復すことができるのに対して、身は破片が細かく接合が困難である。これは、身は破片の状態で、蓋は完形に近い状態で廃棄された可能性が考えられる。これが使用方法の違いと関わるならば、身は内容物を取り出す際など使用の最終段階に破碎されていた可能性を考え得る。

さらに⑥内容物に関する付着痕跡が明瞭でない点も特徴である。SD11270出土板状土製品（図279-3）に縁釉が付着するが、先述のように胎土に差異があり箱形土製品と直接関連づけるには躊躇される。また、12の口縁部内面付近と4の外外面の一部に赤色を呈するガラス質の付着物が観察できた。この赤色付着物に対してX線回折分析を行った結果、ヘマタイト（赤鉄鉱）であること、土製品の胎土に含まれていた鉱物ではなく付着したものであろうとの所見が得られた（脇谷草一郎による）。

この箱形土製品は、規格性の存在と高温被熱が特徴といえ、同じような内容物を高温で加熱して多量に生産していたと考えられる。SK11240が出土遺物からみて造営関連の廃棄土坑としての性格が考えられることから、箱形土製品も造営関連工房に関わる道具の一つであったと推測される。しかし類例に乏しく、機能・用途を推定することは容易ではない。そこで、上の諸条件をふまえつつ、箱形土製品の用途について現状で考えられる4案を提示しておきたい。

A 案 鋳型の外枠とみる。内側に真土を貼り二層構造の鋳型として用いた可能性を考える。時代が遡るが弥生時代後期の唐古・鍵遺跡出土の土製鋳型外枠の例があり⁴⁾、古代では平安京左京八条三坊九町から出土した11世紀後葉の方鏡鋳型が形態的に近い⁵⁾。しかし、湯口がない点、合わせ口にならない点、身の器高が高すぎる点、蓋が不要である点に問題を残す。

B 案 金属・非金属の規格品の成形容器とみる。金属であれば地金の成形をおこなう型の可能性を考える。正倉院伝来のアンチモン地金⁶⁾が小形ではあるが方形を呈しており、方形の型で成形されたとみられる。規格性の存在と最終段階での破碎の解釈には有利であり、蓋の存在も内部への混入物の流入を防ぐ意図として理解可能である。しかし、付着痕跡がない点に問題があり、非

金属の可能性も含めて検討の余地を残す。

C 案 ベンガラの加熱容器とみる。4および12の内外面に付着する赤鉄鉱を内容物に由来するものと解し、これを加熱して酸化を促進させることにより、ベンガラ(酸化第二鉄)の良好な赤い色相を得ようとした可能性を考える。しかし、外面や蓋頂部にも付着する点、酸化促進のためには蓋がない方が有効と思われる点、古代においてベンガラは一般的な顔料であったにも関わらず他遺跡での箱形土製品の出土例が乏しい点に問題を残す。

D 案 窯道具としてのサヤとみる。SD11270出土の緑釉が付着する板状土製品を身I類の底部と解する。調査地周辺では奈良三彩瓦が多数出土しており、本調査区からも緑釉が付着したトチンが出土していることから、周辺に施釉製品の生産遺構の存在を推測し得る。蓋の存在も内部の製品に灰が付着することを防ぐ意図として理解可能である。しかし、箱形土製品の器高とサイズからみて、現在知られている三彩瓦や三彩製品を納めるには窮屈であり、規格性の存在についても理解が難しい点に問題を残す。また緑釉付着トチンはSD11268出土、板状土製品はSD11270出土とSK11240とは異なる段階の遺構出土であり、同時期の遺物とは確定できない。

以上の4案はいずれも有利な点、不利な点があり決め

手に欠く。今後類例の増加により、箱形土製品の性格が明らかになることが望まれる。
(小田)

部 材 SB11250の柱穴から、柱根と礎盤が1点ずつ出土した。柱根(図282・283)は、東南隅の柱穴から出土し、幅、高さとも415mmの芯持材である。樹種はコウヤマキである(星野安治による)。大面取りが施された八角形の形状をもち、1辺の長さは140mmから160mm程度である。下端にエツリ穴をもつ。上部は腐食により切損し、表面も腐食により加工痕跡は残さない。一方、底面の遺存状況は良く、ノミによる加工痕跡および、八角形加工のための墨線を残す。墨線は対となる辺中央を結び、直行する2本の線が確認された。
(前川 歩)

動物遺体 SK11275南辺にあたるSD11270(③層)から、タニシ科の貝殻やスッポンの腹甲(中腹骨板)が出土した。
(山崎 健)

5 自然科学分析

SK11274とSK11275を跨いで被覆するSD11270底面の層位関係と、SK11274埋土にみられた複数の変形堆積構造の成因について検討するため、層相および軟X線撮像による堆積構造観察をおこなった(図284)。その結果、まずSD11270最下層の層位関係は、SK11274から

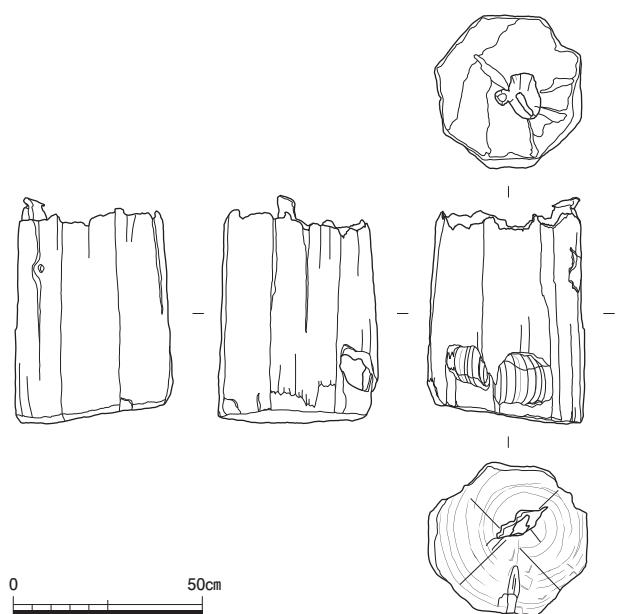


図282 SB11250出土柱根実測図 1:20



図283 SB11250出土柱根・柱根底面(赤外線撮影)

SK11275まで広がっていたSD11270が、SK11275側に掘り込まれていることが明らかとなった（図285・L3-②）。またSK11274埋土の変形構造は、加重痕跡であったことがわかった（L2-①、②）。しかし足跡痕跡などとは異なり、礫や偽礫が鉛直に向かって様々な斜角、方位で流れ込んだことによって形成されたことがわかつてき。このよ

うな堆積構造は異例であり、その形成過程については今後の検討課題としたい。

（村田泰輔）

6 法華寺村絵図について

今回の調査に併せて、法華寺が所蔵する法華寺村絵図の調査を実施した（巻頭図版8・図286）。ここでその知見

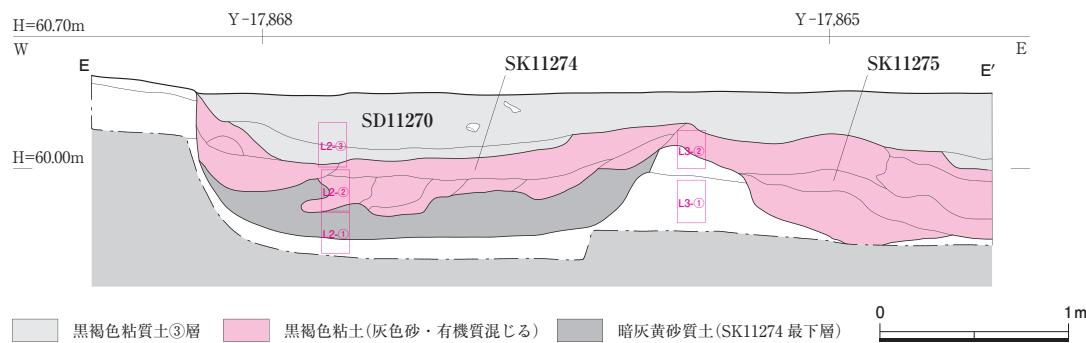


図284 SD11270・SK11274付近 土壤サンプリング箇所図 1:40

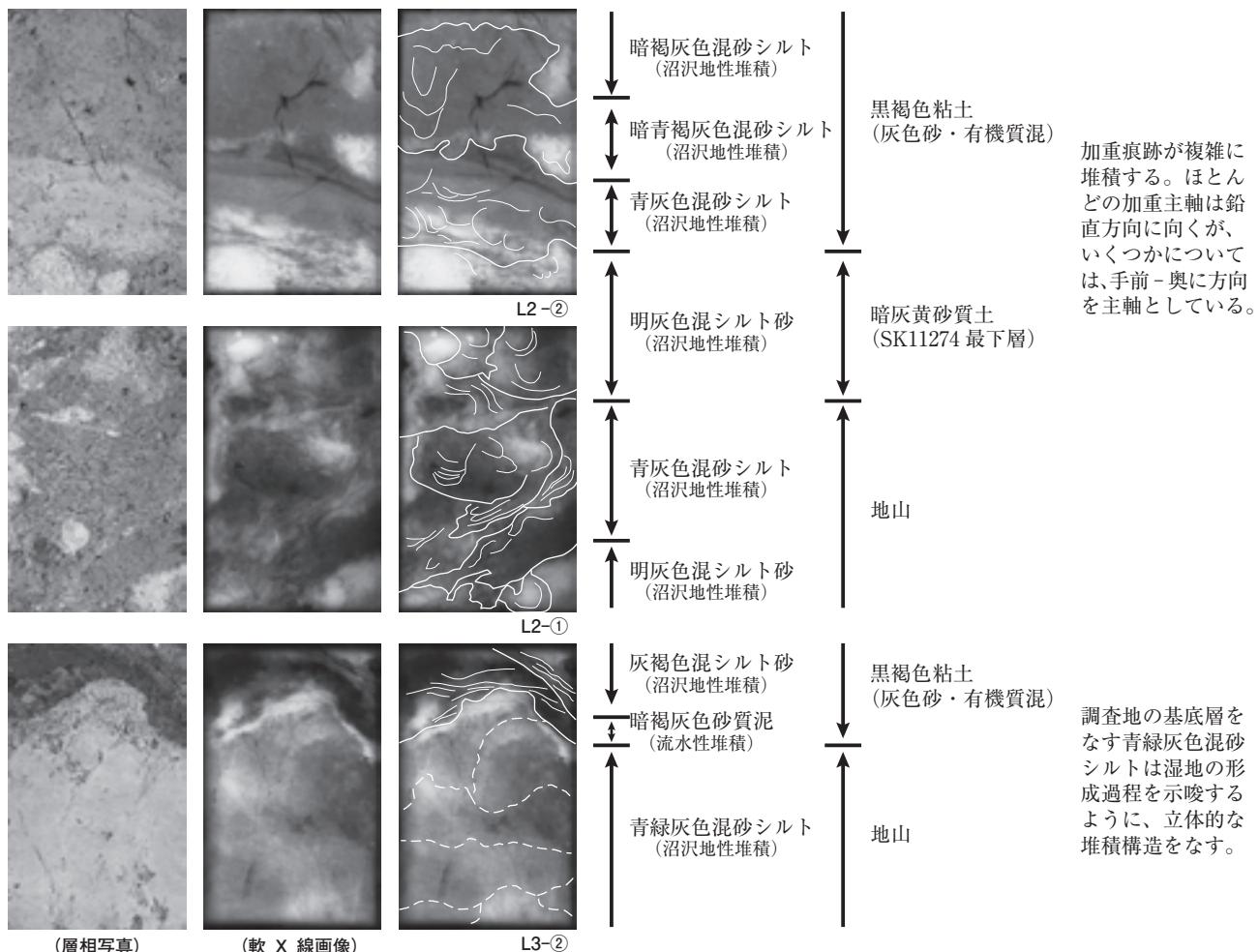


図285 SD11270・SK11274付近 切出試料にみられる堆積構造

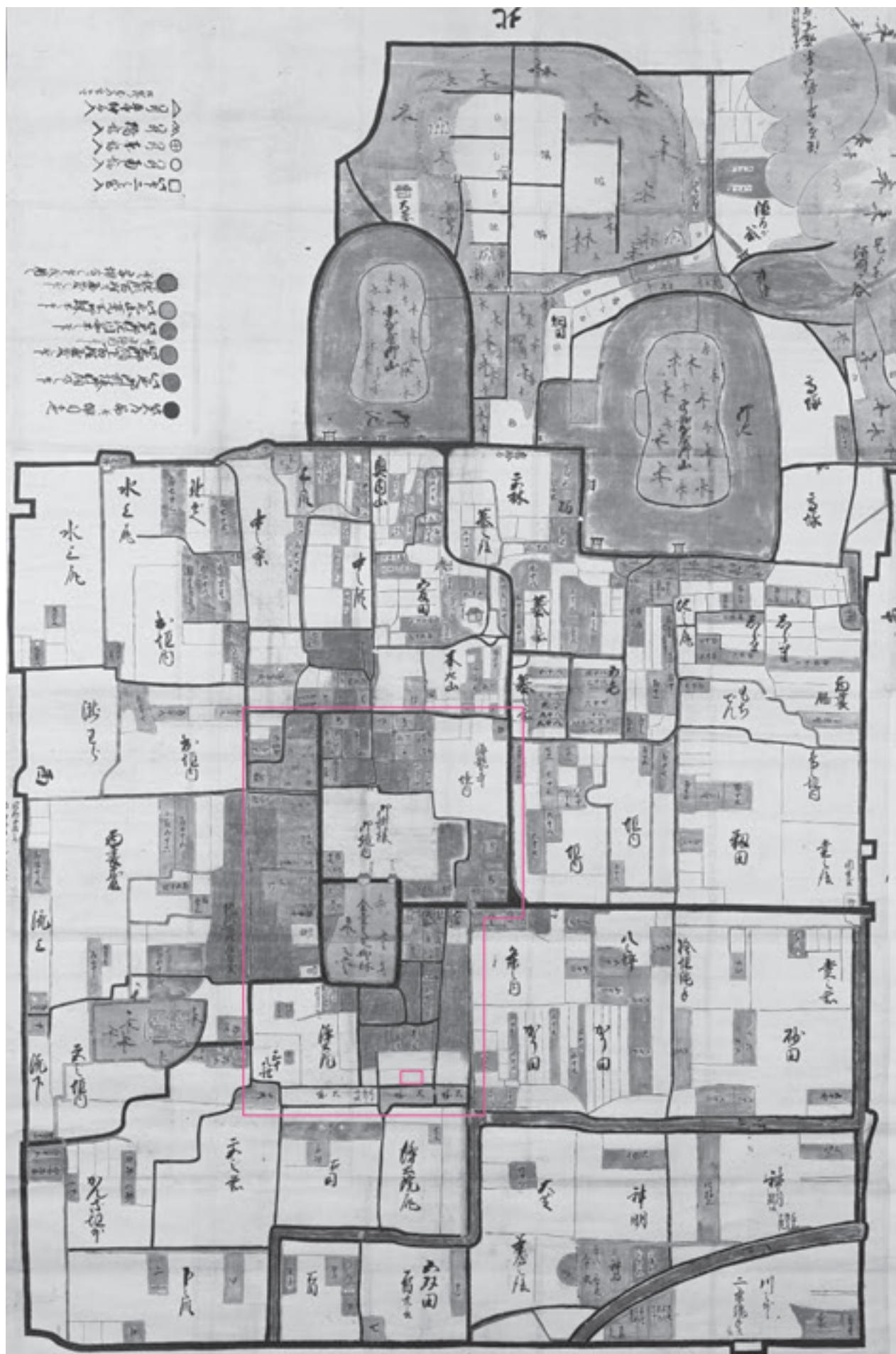


図286 法華寺村絵図主要部分
(赤線は大枠が、太田論文による古代法華寺・海龍王寺境内と隣接道路の範囲。小枠が第601次調査の大体の位置。)

を、今回調査に関連することを中心に述べておく。

先行研究では、太田博太郎・池田源太がこの絵図を使用している⁷⁾。作成年代は不明だが、法華寺の中心伽藍である金堂・中門・東塔・西塔があった場所を「金堂之芝御林」と描く。最後まで残っていた塔一基が地震で倒壊したのが宝永4年(1707)なので、その跡地が林になって以後の、江戸時代中期～後期の状態を描いたはずだ。楮紙の料紙を縦横に貼り継ぎ、現状は掛幅装に仕立てる。右上が張り出した形だが、そこも含めた最大長で縦193.4cm・横148.8cmである。北を天として当時の法華寺村の範囲を描く。左上の余白には横向きに、絵図の凡例を下記のように記す(カッコ内は筆者の注記)。

- (黒)此色道筋并ニ堺目等也
- (橙)此色御所様御領分之印
- (黄)此色御領下百姓屋敷之印 幷ニ御境内之印
- (青)此色御池川筋等之印
- (緑)此色山荒所御林等之印
- (茶)他領百姓共屋敷之印 幷ニ字堺分ヶ之印ニ茂用之
- 此印ニ之室入
- 同断南之坊入
- ④同断東之坊入
- △同断橋之坊入
- △同断寺中仲間入 但時代ニ寄入替候由

すなわち、黒は道・堺目。橙は法華寺領の田畠。黄は法華寺領の百姓屋敷・境内。青は池・川。緑は山・荒れ地・林。茶は法華寺領以外の百姓屋敷と字界である。また□や○などの符号は、それぞれの法華寺領田畠が所属する子院を示す。その他、絵図には地名や建物などを書き込み、法華寺領には番地を記している。以上から本絵図の主たる作成意図は、法華寺領の田畠・屋敷地の所在を明示することだったと言えよう。

絵図によれば、法華寺を囲むように集落があった。まず、法華寺中心伽藍の跡は前述のように「金堂之芝御林」とする。中心伽藍が存在した時期の姿は、延文4年(1359)の東塔別受戒図(太田・池田前掲論文参照)に描かれており、同図では、中心伽藍の外側の範囲を実線で囲っている。鎮守の牛頭天王(現法華寺神社)の位置より見て、この実線で囲んだ範囲が、江戸時代の「金堂之芝御林」の区画だと思われる。伽藍は消滅しても、その跡地として特別視したのだろう。その北側には現在の法華寺境内が「御

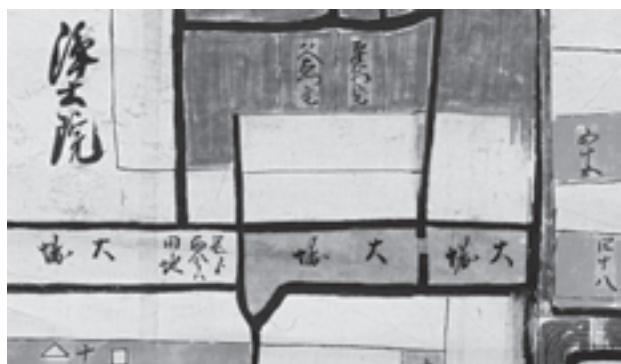


図287 「大堀」周辺

所様御境内」と記される。そしてそれらの周囲に、法華寺村の屋敷地が存在する。屋敷地は法華寺領(黄)も他領(茶)もあるが、法華寺領の屋敷地は比較的、「御所様御境内」に近い場所と、一条通り沿いに立地する。それら法華寺村の集落は、ほぼ、古代の法華寺・海龍王寺の境内に収まっている。その外側には田畠が広がり、法華寺領の田畠(橙)が散在していた。

上記の状態は、奈良盆地によく見られる集村の姿と評価できる。しかし元来は、百姓の屋敷地が尼寺の境内にあったはずがない。この点、村内の田畠には「垣内」という地名が多く見られる。すなわち、法華寺の東方には「垣内」「鳥之垣内」、西北には「出垣内」、西南には「宮之垣内」がある。これらの地名は、かつて散村だった時期の、集落の痕跡である可能性がある⁸⁾。このような散村から集村への変化も、奈良盆地の集落によくあったと考えられている。

今回の第601次調査地は、絵図で「大堀」とある部分のすぐ北に位置する。「大堀」はほぼ二条条間路の地割に当たり、東西に3箇所が並んでいる。東と中央の2箇所は青に着色され、当時も水をたたえていたが、西の1箇所は「是より西今ハ田地」と注記する。そして東と中央の「大堀」の間を通る道には橋が架かり(図287)、環濠集落のように防御的な機能を持っていたと思われる。集村化した法華寺の集落は、ある程度環濠を備えていた時期があり、絵図はその面影を伝えているのだろう。

「大堀」のすぐ北側にある今回調査地では、中世濠状遺構SD11270を検出した。また、その北方の第501次・第514次調査では、縦横に流れる中世の溝を多く検出した。絵図の姿になる以前に、集落内に多様な濠・溝がめぐっていた様相がうかがえる。

そこで注目されるのが、調査地の東北にみえる「条之内」という地名である。この場所は左京二条三坊一坪にあたるが、室町時代に大乗院尋尊が記した『三箇院家抄』第2の佐保田新免田項には、その場所を「号城内一坪一町一反堀マテ」と記す。また同時代の文明9年(1477)『奈良田井新免算田野取帳』には、同じ坪の半反の土地を「堀仁闕了」と記す⁹⁾。この「条之内」の1町1反のいずれかの端に濠が掘られ、そこから内側が城内と認識されたのだろう。また室町時代は川の流れが乱れており、『奈良田井新免算田野取帳』の明応9年(1500)以降の追記部分には「近来佐保川ノ荒田在之、佐保田ノ本免田堤無沙汰ノ間、自然ニ新免田流失了」とある。流路は江戸時代とかなり違っていた可能性はあるだろう。上記を勘案すると、法華寺集落は中世に集村化し、濠・溝も備わって防護的な機能を高めた。それが後の時代に再整理され、江戸時代の絵図に見えるような景観になった、と想定できそうである。

本絵図には、他にも豊富な内容が含まれている。「金堂之芝御林」の南面には、その中央に南北の道が走って「大堀」に至っている。この道は金堂・講堂を中心とする伽藍中軸線上の道と思われるが、現存しない。第281次調査では、法華寺旧境内の南端想定地で門SB7110を検出したが、その位置は伽藍中軸線よりも東にずれた、東二坊坊間東小路上(絵図では西の「大堀」の東端付近)である。発掘の所見では、この門よりも北の伽藍中軸線上に、別途、法華寺中心伽藍の南大門が存在すると想定した(年報1998-Ⅲ)。絵図に描かれた伽藍中軸線の道が古代に遡るのかどうか、注意されるところである。

また、道の西側には「三十八社」という地名が見えその中に小さな橙の法華寺領が存在する。位置より見て、この法華寺領は阿弥陀淨土院跡の立石に当たるだろう。昔は法華寺集落の人が大峰にお参りに行く時にまず立石にお参りしてから行ったという(綾村宏氏が、かつて地元の発掘作業員から聞いた話)。三十八所とは金峯山関係の尊格なので、その話には信憑性があると思われる。

このように、本絵図には多様な情報が含まれている。今回はその一部を紹介したに過ぎない。今後も絵図の活用が進むことを期待したい¹⁰⁾。(吉川聰)

7 まとめ

① 奈良時代の空間利用のあり方が明らかになった。奈良時代前半には東西溝SD11231による区画とSK11240などの造営関連遺構が展開していた。特にSK11240からは特殊な遺物が多く出土しており、いかなる施設の造営工事に関わるものかについて今後の検討を要する。また、奈良時代後半~末頃の八角柱を立てた総柱建物SB11250を検出した。十五坪内からは三彩瓦が多数出土しており、本調査でも調査区西北部を中心に出土したことから、平城京内においても特殊な空間であったことが改めて確認された。今回検出した各遺構と藤原不比等邸や皇后宮、法華寺および阿弥陀淨土院などとの関係については、今後の調査課題である。

② 中世の濠状遺構SD11270を検出した。法華寺村絵図には、調査地周辺に「大堀」という字名が記載された東西に長い水田が記載されており、これはSD11270など濠状遺構に由来する可能性が考えられる。中世から近世にかけての法華寺集落の構造と変遷についての手がかりを得たといえる。

(小田)

註

- 1) 今井晃樹「平城京左京二条二坊の施釉瓦磚」『紀要2018』。
- 2) 前掲註1。
- 3) 法華寺、海龍王寺、秋篠寺の出土品は『大和古寺大觀』第5巻、岩波書店、1978を参照した。
- 4) 田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡I』2007。
- 5) 久保智康「花枝蝶鳥方鏡の鋳型」『平安京左京八条三坊九・十町』古代文化調査会、2007。
- 6) 南倉174-21。成瀬正和「正倉院伝來のアンチモンインゴット」『正倉院紀要』第17号、1995。
- 7) 太田博太郎「法華寺の歴史」前掲註3書・池田源太「法華寺の沿革」『新修国分寺の研究』第1巻、吉川弘文館、1986。
- 8) 喜多芳之『大和の環濠集落』日本古城友の会、1976。東方の「垣内」の範囲内である左京一条三坊五坪に関しては、応永13年(1406)の「法花寺田畠本券」で、その北辺の1反120分の土地の地名を「モミクラ」とする。応永以前に耕倉があったのだろう。ちなみに絵図では五坪の東隣(十二坪)の地名を「耕田」とする。
- 9) 『広島大学所蔵猪熊文書』2、福武書店、1983所収。
- 10) 法華寺村絵図の調査には法華寺のご協力を得た。また『奈良田井新免算田野取帳』の文字の確認には、広島大学大学院文学研究科の本多博之教授のご高配にあずかった。記して感謝いたします。